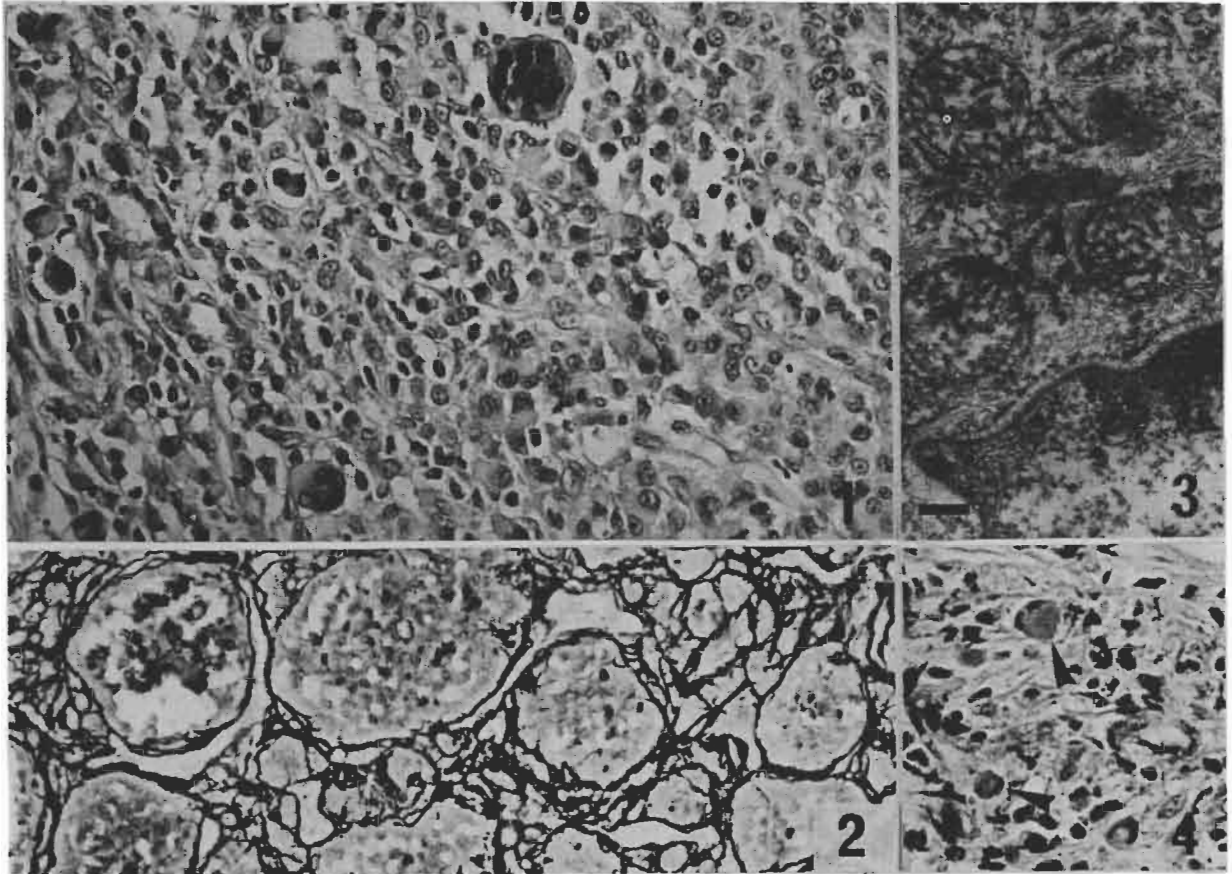


犬の皮下腫瘍

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第31回獣医病理学研修会標本No.543



動物：犬，マルチーズ，雄，12歳，体重4.8kg。

臨床的事項：掌球部の隆起による跛行のため来院。摘出手術を行った。手術後6ヵ月，再発及び転移はない。

肉眼所見：左前肢掌球から指球にかけて大豆大の皮下腫瘍が認められた。腫瘍は充実性で弾力を有し，周囲組織との境界は比較的明瞭であった。断面は灰白色で，少数の充血点が散在していた。

組織学的所見：真皮から皮下織にかけて菲薄な線維性結合組織に被包された細胞密度の高い，比較的充実性の腫瘍細胞の増殖がみられ，一部には管腔様構造を示し，赤血球を容れている所もあった。腫瘍細胞は類円形～不整形，大小不同で異型性が強く，異常核分裂像を示す有糸分裂像もしばしば認められた。細胞質は豊富でエオジンに均質に淡染し，核は1～数個の核仁を有し円形～卵円形あるいは勾玉状で，一般に細胞の辺縁に位置していた。特に目を引くのは，1個から10個前後の卵円形～分葉状の核を有する巨細胞の出現で，中拡大視野に，巨細胞が10個前後認められた(図1，H E， $\times 340$)。腫瘍組織は好銀線維にとり囲まれて，蜂窩状構造を示し，好銀線維に接して一層に細胞が配列し，数層となり，あるいは遊離した状態で増殖し，ついには管腔一杯になる様子が窺わ

れた(図2，鍍銀， $\times 225$)。また電顕的には，腫瘍細胞の細胞質には幅約5～8nmの細い線維が束になり，あるいは錯綜して多数認められ，短径約150nm，長径約650nmの楕円形の特異な小体(Weibel-Palade body)が認められた(図3，矢頭，Bar=250nm)。限界膜に包まれた，この小体の内部には長軸方向に平行に走る結晶様構造が認められた。さらに腫瘍細胞細胞質内には免疫組織化学的に，微細顆粒状のvon Willebrand factor (vWF)が証明された(図4，矢頭， $\times 250$)。

診断及び考察：本症例は犬の肉球部に発生したmalignant haemangi endotheliomaであった。malignant haemangi endotheliomaは犬の好発腫瘍の一つで，めずらしいものではない。しかし一般に本症例のように多数の巨細胞の出現するものは少なく，ほぼ一層の紡錘形の細胞が管腔を形成しつつ，またそれらが吻合するように増殖するのに対して，本症例のように管腔内に重層化するように増殖し，solidな形態をとるものは少ないようである。また本症例のように，H E染色でやや診断に困難を伴う症例ではvWF及びWeibel-Palade bodyの証明がその診断に有用であると思われた。